

令和6年度大村市歴史資料館テーマ展

荒木十畝

会場 歴史資料館 企画展示室 期間 令和7年1月21日(火)－ 2月24日(月祝) 10:00～18:00
作成 大村市歴史資料館



花鳥画金屏風

1918(大正7)年
六曲一双 紙本彩色

新春と秋の風景をそれぞれ描いた鮮やかな一作。十畝が、伝統的日本画から装飾性に富んだものへと作風を転換した時期の作品。

この金屏風は、旧大村藩士・荘家の荘清二氏(当時の三菱本社総理事)の妻の求めによって制作された。



春郊双鳩図

年代不詳
紙本彩色

春夏秋冬の4本からなる「四季花鳥」は十畝の得意とした題材の一つである。これは桜やたんぽぽと佇む2羽の鳩を描いた春の作品。



桜花之図

年代不詳(大正末頃カ)
紙本彩色

満開の桜と短冊を描いた華やかな春の作品。
赤い短冊には豊臣秀吉が詠んだ和歌が書かれている。
「あらためて なをかへてみん 深雪山
うつもるはなも あらわれにけり 松」(釈文)



國華

年代不詳(晩年の作カ)
紙本彩色

69歳で脳溢血を患った十畝は一時右手が不自由になったが、後に回復し、菊を題材とした作品を多く制作したという。また、晩年は幽玄な画風の作品を多く描いており、本作はその頃の作と考えられる。



朝

1924(大正13)年
紙本彩色

大正半ばまでの鮮やかな作品に比べ、墨を基調にぼかしの表現を用いた幽玄な作風に転じている。第5回帝国美術院展覧会(帝展)出品。



かきつばた

年代不詳
紙本彩色 個人蔵

風に揺れるかきつばたと水鳥を描いた一枚。花の群青の部分には雲母が使用されている。



牡丹

年代不詳(昭和10年頃カ)
紙本彩色 個人蔵

画面の半分を占める牡丹の大部分を墨で表現しているが、部分的に金泥を用いるなどの変化を付けている。



松鷹図

1928(昭和3)年
紙本彩色 上久原町内会蔵

昭和天皇即位の御大典(昭和3年11月)の記念として、上久原在郷軍人班の依頼を受けて制作され、熊野神社に保管されていた作品。鳥を画面中央に大きく配置するスタイルは、晩年の十畝の作品に多く見られる。



芦雁・松にかささぎ

1915(大正4)年
二曲一双 紙本墨画

十畝の師・寛畝^{かんぼ}が亡くなった年の作品。寛畝の影響を強く受けた、伝統的な画題が用いられている。左隻の芦雁は十畝が得意としたモチーフである。



南国花鳥図

1936(昭和 11)年頃
紙本墨画彩色

十畝は 1931(昭和6)年のタイにおける日本美術展に出展し、タイからインド、南洋諸島を歴訪した。「南国花鳥図」は実芭蕉と見られる葉にとまる鳥が描かれ、訪ねた南国での取材を反映し制作されていると考えられる。



柳と五位鷺

1936(昭和 11)年頃
紙本墨画彩色

下方を見つめる五位鷺の一瞬の様子を切り取ったような作品。緻密に描かれている部分と、流れるような筆運びで描かれた部分があり、メリハリが見られる。



うずら 鶉

年代不詳
紙本彩色

小菊やリンドウなどの草花と鶉を描いた作品。制作年は不明だが、十畝の描いた四季花鳥のひとつ「秋野双鶉」(大正 10 年作)は本作とモチーフなどが共通している。

花鳥画を得意とした日本画家

あらき じっ ぽ
荒木 十畝 (朝長 悌二郎)

1872 - 1944



1872(明治5)年、東彼杵郡大村の久原(現 大村市久原2丁目)に旧大村藩士・朝長兵蔵の次男として生まれる。旧制大村中学校に進学し、当時すでに「琴湖」の雅号で制作をしていた。1892(明治25)年に旧藩士である貴族員議員・渡辺清を頼り上京、渡辺から同じく議員である野村素介を介し、日本画の名門である荒木寛畝に弟子入りした。師である荒木寛畝の娘・鈴と結婚し荒木家を継いでからは「十畝」を名乗っている。

時代と主義

明治政府の近代化政策のもと、日本画家たちは西洋文化至上主義のなかで不安定な立場にあったが、1887年頃から西洋化一辺倒の政策に批判の声が高まり、近代日本画の在り方が再考されるようになった。

伝統的日本画の継承を重視した保守派と、日本画の改革を図る急進派が対立するなか、十畝は伝統を継承しつつも新しい日本画の構築を目指す「守旧漸新主義」を掲げた。

作風

1915年、師である寛畝が亡くなった。十畝は寛畝流の余白美を活かした伝統的な様式や画風を受け継いでいたが、師の死後、自らの理想とする花鳥画を追及し、装飾的で極彩色な世界へと作風を変化させ、当時の画壇において花鳥画の十畝としての位置を確立した。

その後、「東洋画は精神的で西洋画は物質的である」との考えから、『朝』『牡丹』のような明暗濃淡描法を生かした幽玄で精神性の高い作風へと変化させた。

著作

十畝の活動の軌跡は、近代日本画の歩みと方向を同じくしながらも、自らの「守旧漸新主義」の道を進み、象徴主義的な世界に終着した。1942年に上梓した著作『東洋画論』では、そのような活動の展開をした十畝が会得した技法や芸術的理念について述べている。

「東洋画は精神的で西洋画は物質的である」とした由縁についてもここで触れ、東洋画と西洋画について、太陰暦と太陽暦に基づいた視点と思想の違いから解釈している。

大村市の荒木十畝コレクションの形成

旧大村市立史料館の荒木十畝作品所蔵第1号は、1984(昭和59)年に市内上久原町内会から寄託を受けた昭和天皇御即位を祝う作品『松鷹図』だった。続いて市内八坂神社から『猫牡丹』の寄託を受けた後、しばらく十畝作品の所蔵数に変動はなかったが、1989(平成元)年に東京都練馬区立美術館で開催された「荒木十畝とその一門」展で当時の大村市長・松本崇が、大村市でも十畝作品の収集と展示をしたい旨を伝えたところ、永福寺(東京都)の御住職の耳に入り、1993年に『朝』の寄贈を受けた。

この動きを受け、1997年に絵画作品や日本画家としての十畝を表す資料のみならず、十畝という近代の大村の先人を形成した資料を対象とした、当館の荒木十畝コレクションの収集活動が始まった。

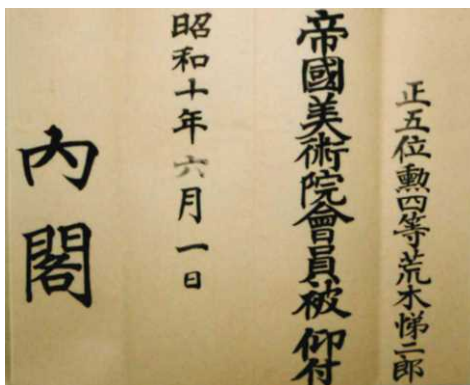


永福寺関係者寄贈の十畝
模画『鳥羽僧正筆』卷子

永福寺は、大正12年に関東
大震災で被災した十畝が一
時身を寄せた寺である。

特に1999年には、東京在住の十畝の御子孫から約900点もの関係資料が寄託(後に寄贈)され、当館のコレクションは大いに充実することになった。その多くはモチーフの細部に迫ったものや作品として昇華するための習作や粉本であり、十畝の作品制作の前段階や過程をうかがい知れるものである。また、この資料群には師である寛畝や同門の作、十畝が受けた帝国美術院などの会員任命書、日本美術協会などの賞状、軍からの感謝状などが含まれており、日本画家・荒木十畝を形成したものや、画家としての活動の片鱗を示すものとして貴重な一群となった。

以後、大村市では引き続き十畝関係資料の寄贈・寄託を受け入れ、収集を継続している。



1999年寄贈 帝国美術院会員任命書



1999年寄贈 絶筆『柏白鷹』下絵カ

テーマ展「荒木十畝」 展示資料リスト

大村市歴史資料館 企画展示室

開催期間：令和7年1月21日～2月24日

作品名・資料名	年代	数量
花鳥画金屏風	1918（大正7）年	紙本彩色 1
春郊双鳩図	年代不詳	紙本彩色 1
桜花之図	年代不詳(大正末頃か)	紙本彩色 1
習作 桜花	年代不詳	紙本彩色 1
國華	年代不詳(晩年の作か)	紙本彩色 1
菊 下書き	年代不詳	紙本墨画 1
朝	1924（大正13）年	紙本彩色 1
習作 蓮の花	年代不詳	紙本彩色 1
かきつばた【個人蔵】	年代不詳	紙本彩色 1
習作 蘭	年代不詳	紙本彩色 1
牡丹 【個人蔵】	年代不詳(昭和10年頃か)	紙本彩色 1
芍薬	年代不詳	紙本彩色 1
松鷹図 【上久原町内会 蔵】	1928（昭和3）年	紙本彩色 1
鷹 下絵	年代不詳	紙本墨画 1
鷹	年代不詳	紙本彩色 1
芦雁・松にかささぎ	1915（大正4）年	紙本墨画 1
柳と五位鷺	1936（昭和11）年頃	紙本墨画彩色 1
南国花鳥図	1936（昭和11）年頃	紙本墨画彩色 1
鶉	年代不詳	紙本彩色 1
荒木十畝一族写真	1935（昭和10）年4月	1
大礼服姿の荒木十畝写真	昭和期	1
荒木十畝写真（中国へ渡る船上か）	大正末～昭和初期	1
荒木十畝 落款		6
荒木十畝愛用の硯		1
鳥獣写生巻（写）	年代不詳	紙本彩色 1
鳥スケッチ	年代不詳	紙本彩色 1
松に鶴（画帳）	年代不詳	紙本彩色 1
春・夏の草花	年代不詳	紙本彩色 1
芙蓉花（春の野草）	年代不詳	紙本彩色 1
習作 ナンテン	年代不詳	紙本彩色 1